

道徳学習におけるICTの活用について

～道徳学習における学びを高める効果的なICTの活用場面を考える～

大石田町立大石田南小学校 小山 昌道

<研究の概要>

本研究では、道徳学習における学びを高めるためのICTの効果的な活用について研究した。そのために、ICTの効果的な活用場面を考え、実際に活用を図り、児童の様子を観察して興味・関心にどのような変容が見られるかを検証した。また、授業の中で発問をするときに、図表や映像を組み合わせて提示すれば、考えを深め主体的な学びを子供たちに促すのではないかと考えて活用を図った。その結果、ICTを活用し図表や映像を提示することで、導入場面では学習する内容への興味・関心を高める効果があった。展開場面では、場面を捉えたり、発問を理解したりするときに効果が見られた。終末場面では、内容をふり返り学習した価値を高める手立てとして有効であった。また、実物投影機、大型テレビなどで図表や映像を拡大して提示することで、発問場面が捉えやすくなり、話し合い活動を活発にしたり、自分の考えをまとめやすくしたりする効果が見られた。

これらから、道徳学習の中でICTを効果的に活用することは、子供たちの主体的な学びを促し、ねらいとする道徳的価値へと思考を向かわせる手立てとして有効であることが分かった。そして、ICTと既存の学習方法との連携を吟味し、日常的に利用できる環境を教室内に整えることで、活用の幅や用途を広げる結果となり、日々の道徳学習の授業改善につながった。

1 研究のテーマ

急速なグローバル化の進展に伴い、子供たちを取り巻く環境や社会の変化に対応できる力を子供たち自身が身に付けることは非常に重要である。そのため、子供たちの発達の段階に応じて積極的にICTを活用しながら情報活用能力を育成することは大切であり、学校教育においては、各教科を通してその育成を図ることが望まれ、ICTを活用した教育を推進することが求められている。

本校では、コンピュータールームに児童用コンピュータが25台設置され、各階には、実物投影機と授業用パソコンが1台ずつ備えられている。また、各教室には、移動式の大型テレビが1台ずつあり、校内LANへの接続端子が設けられ、パソコンを利用することでいつでもWeb環境へのアクセスが可能となっている。特に、実物投影機と移動式の大型テレビは、図表や映像を拡大して子供たちに提示するICT機器として、日々の授業で大いに活用されている。

本学級（第5学年、男子13名、女子5名、計18名）の子供たちは、学習活動に意欲的に取り組むことができる子供が多く、ICTに対して大きな関心を持っている。実物投影機を利用してノートを拡大して自分の考えを発表したり、タブレ

ットPCで撮影した映像を見たりした学習経験があり、授業の中でICTを取り入れて学習を進めることを肯定的に捉えて、進んで活用したいという様子が見られる。一方で、普段の授業では、課題がはっきり把握できないとその後の学習活動が停滞したり、話し合い活動で自分の立場や考えが明確でないと発言が消極的になったりする傾向が見られる。そのため、ICTを学習活動の中で効果的に活用することで、子供たちの興味・関心を引き出し、互いにいきいきと学び合う主体的な学習活動を進めることができると考えられる。

また、昨年度までの委嘱研究の成果として、ICTの効果的な活用方法として、図表や映像などを大きく拡大して提示することで、大勢の考えを距離や時間を問わずに瞬時に共有できること（瞬時の共有化）、資料を見せながら話し、分かりやすく説明やまとめをすることで、子供たちの思考の過程や結果を可視化（思考の可視化）できる利点が明らかになった。また、拡大された図表や映像を提示することで、児童の興味・関心を大いに引き出し、課題意識が高まるなど、子供が学習活動に意欲的に取り組む効果があることも明らかになった。そのため、今年度の研究を進めるに当たり、教科・学習領域の中から道徳学習に注目し、IC

Tを活用した授業づくりやその改善方法について、道徳の授業の中でICTを活用することで、子供たちがいかに道徳的価値への関心を高め、それらを自分とのかかわりで考えようとするなどの主体的な学びを促すことができたかに焦点を当てて研究を進めていきたいと考えた。そして、ICTを活用することによって、子供たちが道徳的価値により迫り、思考をめぐらせ、いかにいきいきと学んだかを検証したいと思い本研究テーマを設定した。

2 仮説

(1) ICTを利用して資料の提示を工夫すれば、子供たちは道徳的価値にかかわる事象への興味・関心を高めることができるであろう。

(2) ICTを利用して発問に関する道徳的価値にかかわる事象を画像や動画とともに提示すれば、子供たちはより考えを深め、主体的な学びを促すことができるであろう。

3 研究の方法と計画

(1) 仮説1について

① 道徳学習における資料の提示や読み取りの際に、図表、写真や動画を拡大提示することで子供たちの興味・関心がいかに高まったかを記録・検証する。

② 子供たちの道徳学習の実態を把握し、ICTを活用することで興味・関心を引き出す学習活動を考え、実際に活用を図る。

(2) 仮説2について

① 道徳的価値にかかわる場面で、図表、写真や動画等とともに発問することで、ねらいとする価値への気づきが容易になると考えられ、登場人物に共感し、自分とのかかわりで考えようとする主体的な学びを促すことができたかを記録・検証する。

② 発問への自分の考えを書くためのワークシートを準備して、考えを書かせることで子供たちの考えや発表場面での児童の話合いが活発になったかを見取るようにする。

まずは、授業の中のどんな場面で、また、どのような形態でICTが利用できるのかを実際に活用を図り検証していく。その中で、発問場面と関

連させてICTを活用することで子供たちの学びの様子がどのように変わったかを考察していきたいと思う。

4 研究の実践

(1) 実践1【導入場面での活用について】

①実践の概要

ア 主題名

・自分ができることを

{内容項目 4-(3)役割・責任}

資料名「どこかでだれかが見ていてくれる - 福本清三 -」(文溪堂5年生の道徳)

・自分の役割に向かって

{内容項目 4-(3)役割・責任}

資料名「おもちゃのシンフォニー」

(文溪堂5年生の道徳)

イ ICTの活用について

道徳の授業において、導入場面では、資料へ子供たちを引き込み、道徳的価値に意識を向かわせることがとても重要になってくる。そのため、導入場面で、資料にかかわる、図表、写真や動画などを、実物投影機、タブレットPCや大画面テレビを用いて視覚的に見せ、その後の学習活動への子供の興味・関心を引き出すことをめざして取り組んだ。

②子供の学びの姿

資料「どこかでだれかが見ていてくれる - 福本清三 -」(文溪堂5年生の道徳)に登場する福本清三氏は、時代劇の「きられ役」として有名な方で、独自のきられ方を考案し、ハリウッド映画にも出演するなど、後に世界的にも知られるような俳優になった。資料には、顔写真などがあるが、ほとんどの子供が知らない人物であり、その人物像や生き方に触れるためにインターネット上で公開されている実際に福本氏が切られるシーンを授業の導入場面で視聴することにした(写真1)。普段、道徳の授業に興味をあまり示さないA児は、導入場面での福本氏を知っているかの問いにさほど興味を示さずに発言はなかった。しかし、福本氏が切られる場面を視聴すると、食い入るように見つめる姿があった。他の子供たちも視聴後は、福本氏の苦難や小さな役でも全力をつくす気持ちを知り、その後の話し合いでは活発な意見が出される結果となった。

また、資料「おもちゃのシンフォニー」(文溪堂5年生の道徳)を資料として扱った授業の導入では、役割や責任について事前に行ったアンケートの結果をPowerPointによるプレゼン形式で提示した(写真2)。子供たちにとっては、ランキング形式で発表される自分たちの意識調査に対して、予想するつづやきや結果に対する意見などが活発に話され、前述のA児が挙手して自分の考えを発表する場面も見られた。



(写真1)



(写真2)

(2) 実践2【展開場面での活用について】

①実践の概要

ア 主題名

- ・ 誠実に{内容項目 1-(4)正直誠実・明朗}
資料名「手品師」(文溪堂5年生の道徳)
- ・ 自分の役割に向かって
{内容項目 4-(3)役割・責任}
資料名「おもちゃのシンフォニー」
(文溪堂5年生の道徳)

イ ICTの活用について

道徳の授業において展開場面では、資料と発問を通して、考えたことを話し合い、より価値に迫っていくことが求められる。今までは、子供たちの思考を高めた価値に方向づけるために、また、考える場面がイメージしやすいように図や写真を拡大して黒板に提示することを行ってきた。しかし、今回はコンピュータやタブレットPCを活用して拡大提示し、写真や図などを大画面テレビで見せることにした。具体的には、資料にあるイラストや写真などを撮影し、発問場面に合わせて提示することや教師側で意図した点に着目できるように画像を加工して提示したことが挙げられる。

②子供の学びの姿

資料「手品師」(文溪堂5年生の道徳)では、手品師が男の子とした約束を選ぶべきか、それともやっとならぬチャンスの大劇場に行くべきかを中心発問にして、それぞれの立場

を明確にして話し合いを進めることにした。その際、黒板横の大画面テレビには、資料の中にある苦悶する手品師の図を拡大するなどの加工を行い大画面テレビで子供たちに提示して発問することにした(図1, 写真3)。子供たちはそのイラストから十分にイメージが膨らんだようで、学習カードに書いた自分の考えには、どちらにするか迷う手品師の気持ちの揺れなどに共感して考えを書く子供が多く見られた。



(図1)



(写真3)

また、資料「おもちゃのシンフォニー」(文溪堂5年生の道徳)で行った授業では、資料のイラストをタブレットPCで撮影して、大画面テレビで発問する場面に合わせて提示した。中心発問では、登場人物の取り上げたい言葉や、考えさせたい主人公の気持ちを吹き出しにして画面横に掲示し、より登場人物の立場に立って考えることができるように工夫した(写真4・5)。その結果、B児は、普段は自分の考えがなかなかまとまらず、書いてまとめることを苦手としているが、画面のイラストや提示された吹き出し部分を見つめる様子が見られ、自分の考えをワークシートに書くことができた。その後、自分から挙手してクラスの子供たちの前で発言する場面があった。これらの活用では、イラストを描いたり、資料を別に準備したりする時間や手間が省ける効果があった。また、データ化することでいつでも提示できるよさがあった。そして、画面横に提示したカードを、そのまま黒板への掲示として利用したことで、より構造的な板書ができる結果となった。



(写真4)



(写真5)

(3) 実践3【終末場面での活用について】

①実践の概要

ア 主題名

- ・ 自分の役割に向かって
{内容項目 4-(3)役割・責任}
資料名「おもちゃのシンフォニー」
(文溪堂5年生の道徳)

イ ICTの活用について

道徳の授業において、終末場面では、学習してきた価値をより高めるような説話や資料の提示などを通して自分自身と比べてふり返りを行うことが大切になる。この実践では、役割や責任にかかわる生活場面を、普段から持ち歩いているタブレットPCで撮影し、授業の終末に活用することで、学習した価値をより強く印象付けようと考えた。

②子供の学びの姿

授業を構想する段階で、今回学ぶ役割や責任に通じる価値がより高まる方策がないか思案している段階で、6年生の朝の奉仕活動が思い当たった。その様子をタブレットPCで撮影するとともに、インタビューでは、役割の大切さを語った場面を撮影させてもらった。これを授業の終末のふり返りで視聴させ、本時の感想を書かせた(写真6)。その中で、C児は、今までの自分の役割への取り組みをふり返り、6年生のがんばりや思いを知り自分たちも奉仕活動をやってみたいと感想をまとめた。他の児童も、自分たちの役割や仕事をしっかりと行いたいとまとめるなど、実際の映像を見ることで学んだ価値を高めることができた。



(写真6)

5 結果と考察(成果と課題, 研究を終えての提言)

(1) [仮説1]について

道徳の授業におけるICTの活用としては、以下のような内容で活用することができた。

①導入場面

- ・ 資料に関する図表や映像を拡大提示する。
- ・ 事前アンケートの結果をプレゼン資料にして提示する。

②展開場面

- ・ 発問場面に合わせて図表や映像を拡大提示する。
- ・ ワークプリントとの内容と関連させて図表や映像を提示する。

③終末場面

- ・ 価値に関連する図表や映像を提示する。
- ・ 教師の説話時に補助資料を提示する。

これらの場面で活用したことで、子供の興味・関心を引き出し、考えをしっかりとまとめて

発言が活発になる効果が見られた。また、教師側にとっては、資料準備の手間が省けたり、より価値にせまる資料の提示ができた。ICTの活用は道徳の学習においても十分に有効であり、子供の学びを高めることができる。そのためにも、今後も道徳的価値にせまるICTの活用方法を工夫していく必要がある。

(2) [仮説2]について

子供たちへの道徳学習時のICT利用に関するアンケートの結果は以下の通りだった。

(5段階評価, H27年11月実施, 一部抜粋)

問 (道徳の授業でICTを活用して) 自分の考えがまとめやすくなりましたか。

⑤とてもまとめやすかった…11人

④まとめやすかった…3人

③どちらでもない…3人

②・①(まとめにくい等)…なし(無答1人)

この結果からも、子供たちの多くは、ICTの活用が学びの手立てとして有効であることを意識していることが分かる。発問場面を見ながら考えることで、よりイメージしやすくなり、共感したり、深く考えをめぐらせたりすることができたからだと思われる。一方で考えを書くワークシートと発問場面のICTによる提示の仕方が同一だとより考えをまとめやすい結果となったため、利用にあたっては関連を十分に図ることが必要である。

(3) 研究を終えての提言

今後も学習活動の中でICTをより効果的に活用する場面を考えていくことが求められ、子供たちの興味・関心だけを求め、一時的な利用にとどまるのではなく、学習をより分かりやすくする道具としてICTを捉えて積極的・日常的に活用を図っていくことが求められる。そして、普段の授業で大いに活用することで、新たな活用のアイデアが生み出されていくと思われる。

また、今後の課題としてICTをより一層活用していくためには、児童のICT活用能力を高めていくことはもちろん、既存の学習方法との連携や、教室環境の整備や機器の設置などを吟味していく必要がある。

6 参考文献

- 『初等教育資料平成27年6月号・7月号(No.927, 928)』東洋館出版
- 『教育ICT活用事例集』(財)日本視聴覚教育協会